

供覽

内閣書記官長

内閣書記官

請第五〇號

昭和六年十二月十五日

内大臣祕書官長侯爵木戸幸一



内閣書記官長森

恪殿

皇統御太元及肇國ノ紀元ニ関スル請願ノ件

松永良作

右奉呈別紙請願書ハ曩ニ昭和四年一月十四日  
附ヲ以テ内閣總理大臣ニ參考送付アリタル皇  
統御代敷、起算及肇國ノ紀元ニ関スル請願  
ノ件、再願ナルヲ以テ依命及御轉送候

雜乙 六五

内大臣府



萬世一系ノ皇統御太元並ニ  
肇國ノ紀元ニ關スル請願書





萬世一系ノ皇統御太元並ニ肇國ノ紀元ニ關スル請願

廣島縣安藝郡瀬野村草莽之臣松永良作誠恐誠惶

謹ミテ惟ミルニ我大日本國

皇帝陛下ハ 天祖即チ皇太祖

天照皇大神ヨリ神代人皇ヲ通ジテ萬世一系ニ連綿シ給ヘルニ拘ハラズ從來コノ 皇統ノ御代號ヲ 人皇ノ祖 神武天皇ヨリ起算シ奉リ我國ノ紀元モ亦同帝御即位ノ年ヲ以テ元年ト定メラレアルモ 人皇ノ祖ハ 神代ノ祖ト異姓ノ帝王ニアラセラレズ又其宗系ヨリ分レテ別ニ一國ヲ立テサセラレタルガ如キ副系ニモマシマサズ 天祖ノ正系タル皇室ニ御誕生遊バシテ御年十五ノ時 御父 鵜草葺不合尊ヨリ既ニ 皇太子ニ定メラ

レ給ヘル御方ナレバタトヒ中州御平定ノ御事ナクトモ我國ノ 天位ニ就カセ給フベキ御資格ヲ有シ給ヘリサレバ萬世一系ノ皇位ハ 神武ノ御偉功ニ依リテ初メテ贏チ得給ヒシニアラス即チソノ御即位ハ甚ダ恐レ多キ例ナレトモ鎌足ノ中臣氏ニ於ケルガ如ク

君ヨリ賜ハリタル恩姓ニ依ツテ藤原氏ノ祖トナリシガ如ク又家康ノ徳川氏ニ於ケルガ如ク新ニ重職ニ任ゼラレテ徳川將軍ノ祖トナリシガ如ク無資格ヨリ有資格ニ入ラセ給ヒシニアラス既ニ有シ給ヘル 皇太子ノ有資格ヨリ有資格ニ入ラセ給ヒシモノニシテ無資格者ヨリ有資格者ニナリ給ヒシニアラス

試ニ 人皇ノ祖ノ御事蹟ノ大要ヲ他ノ 諸帝ノ御事



蹟ニ比シ奉ランニ先ツ

神武天皇御東征ノ御壯舉ハ其御趣旨ニ於テ 景行天皇  
ノ御西征若クハ 仲哀天皇ノ御西征ニ同ジ皆 皇祖ノ  
授ケ給ヒシ國ヲ安ラカニ治メ給ハンガ爲メニ國內ニハビ  
コリタルマツロハヌ者共ヲ討チ平ゲ給ヒタルナリ即チ内乱  
ヲ御鎮定マシマシタルナリ決シテ最初ノ御創業若クハ  
領土擴張ノ爲メニ他國ヲ侵略シ給ヒタルニアラズ  
又 神武ノ御遷都ハ其御道程ノ長サニ於テ 明治ノ  
御遷都ニ同ジ而モ 天孫ノ高天ケ原ヨリ筑紫ノ日  
向ニ御遷都マシマセシ規模ノ大ナルニハ及バセ給ハズ  
又 神武天皇御即位ノ御儀式ハ他ノ 歴代御即位ノ  
御儀式ト同ジク 同帝萬歳ノ御即位式ニシテ決シテ萬

三  
四

世ニ涉ラセラル、 皇位始メト云フ義ノ御儀式ニテハア  
ラセラレズ皇國ノ皇位ハ千早振ル神代ノ昔ニ於テ世界  
人類ノ大祖先ニテマシマス

伊弉諾 伊弉册ノ二尊ガ——宇宙ノ萬有ヲ統宰シ  
給ヘル 天之御中主神以下諸ノ天神ノ神勅ヲ承ケ  
給ヒテ——國土ヲ開キ蒼生ヲ生ミ而シテコレガ統宰ノ  
爲ニ天ノ下ニ主トシテ生ミ奉リ給ヒシ 貴子即チ  
天照皇大神御出現ノ御時ニ肇マラセ給ヒコノ 皇位ノ  
萬世無窮ニ傳ハラセ給フコトノ御儀式モ既ニ 皇祖  
皇大神ガ 皇孫ノ尊ニ 天ツ日嗣ノ御璽タル三種ノ  
神器ト共ニ我大日本ノ國土ヲ授ケ給フ御時「天壤無窮」ノ  
御神勅ヲ以テ完全ニ行ハセ給ヒキサレバ 宮中ニ於カセ



ラレテハ 皇孫瓊々杵尊以來御歷代ノ天皇何レモ  
天照皇大神ヲ 皇祖ト崇メ奉リ祭祀ヲ慎ミ至大ノ  
孝養ヲ盡シ給ヒ國民モ亦皆

伊勢大廟ヲ國家ノ總氏神ト唱ヘ奉リテ世々崇敬シ  
祀リケレバソノ大祭日ハ往古ハ恰モ皇國ノ建國祭  
卽チ肇國ノ紀元節ニモ該當シタリシモノナリトモ  
言ヒ得ベシ

次ニ御政治ヲ伺ヒ奉ルニ 神武天皇ハ天上乃至日向  
朝廷ノ御政治振ヲ一層ニ御整頓遊バシタレモソノ御政  
體ノ祭政一致タリシトイフ點ニ至リテハ 帝以前及ビ以  
後八朝ノ間ニ異レルコトナシ故ニ政變トシテハ此御時ヨ  
リハ寧ロ 崇神帝ノ祭ト政トヲ區別シ給ヒシガ如キ

六五

孝德帝ノ大化改新ノ如キ 後鳥羽帝ノ政治ヲ武門ニ  
委ネ給ヒシガ如キ又近ク 明治帝ノ立憲政ヲ布キ  
給ヒシガ如キヲ以テ著シトスサレバ 崇神ノ御代六  
年迄行ハレタル我國最初ノ政體ハ 人皇ノ祖以前  
ニ溯リテ遠ク 天祖ノ御代ヨリ始マレリ

此外産業ノ基モ教育ノ淵源モ亦皆然ラザルハナシ  
然ルヲ太古神代ノ事ハ沙漠トシテ攷フベカラズトナシテ  
是ヲ究メズ或ハ 列聖ノ御代號ヲ 中興ノ祖ヨリ數  
ヘ奉リ或ハ又我帝國ノ紀元ヲソノ年代ノ途中ニ置キ  
テ殆アラユル場合ニ我國ハ 神武創業以來云々ト稱  
フルキハ我國ノ年齢ハ其古サニ於テ世界歷史上ノ立場ヨ  
リ見テ第一流トナルノミナラズ我 皇基ハ 大神ノ神勅ニ



依リテ確實ニ定マラセ給ヒシヲ 神武ノ御武威ヲ  
仰ギテ始メテ確實トナリシカト迄疑ヒ奉リ若クハ  
萬世一系ノ皇位モ 神武ノ中州御平定ニ依リテ  
始メテ認メラレ同時ニ 皇大神ノ神勅ガ有効ト  
ナラセラレタルカノ如クニ伺ハレ即チ天爲ハ人爲ニ  
見エサセラレテソレト引替ヘニ一面ニ於テハ彼ノ長髓彦  
ヤ 大國主命ノ一系ガ我國土ノ主權者トシテ却テ内  
外ヨリ 大統以上ニ認メラレ隨ツテ我國體ノ金甌  
無缺ナル所以ガ 人皇ノ祖以後ニ於テノミノ事ニ屬  
シ以前ニ於テハ開闢以來幾度カノ革命アリタリシ  
モノカノヤウニ誤マラレ殊ニ 神武天皇ガ 皇祖ノ  
授ケ給ヒシ國ヲ安ラカニ治メ給ハンガ爲メニ起シ給  
ヒシ御東征ノ御舉ガ一ノ侵略ニ見エ給ヒテ内外ヨリ我  
建國ノ基ガ外國ノソレト等シク始祖ハ互ニ攻伐ノ結  
果最後ノ勝利者トシテ現ハレ給ヒタルモノカノ如クニ伺  
ハレテ内ハ將來國民ヲシテ我國體ガ史實上 君幹臣枝  
ノ 君臣關係ナルヲ征服者被征服者ノ君臣關係ナリト  
誤解セシムルノ虞アルト同時ニ外ハ外國ヨリモ亦我國ヲ  
軍國主義ノ國ナリト疑ハシムル遺憾アリ  
而シテ 皇澤ノ直接ニ及ブ國土ノ範圍ハ 人皇ノ  
祖以前ハ素ヨリナレドモ以後ト雖モ時代ニヨリテ廣狹  
アリ其位置モ皇都ノ位置ト共ニ時代ニヨリテハ多少  
西東ニ移動セリ即チ 皇祖皇大神ノ御時ニハ天ノ  
下ヲ悉ク治ラシ給ヒ 皇孫瓊々杵尊ノ御時ニハ豊葦原



ノ瑞穂國ヲ悉ク治ラシ給ヘリ然ルニ日向朝廷ノ終リ頃  
ソノ中部以東 皇命ヲ奉ゼズナリシカバ 神武帝討チ  
テコレヲ復シ給ヘリ夫ヨリ凡ソ十世ノ後我東國及  
ビ西陲叛キシカバ 景行帝討チテコレヲ復シ給ヘ  
リ尋デ 仲哀天皇ノ御末年 神功皇后征韓以來韓土モ  
久シク我屬國トナリタリシガ其後屢々叛キ 天智帝  
ノ頃ヨリ遂ニ我國ヲ離レシガ 明治天皇ノ御時再ビコ  
レヲ我國ニ併セ給ヘリ中世以後時ニハ國歩艱難ノ  
患アリ又國威大陸ヲ壓シタル盛アリ而シテ其後ニ  
於テ更ニ海外諸方面ニ幾多ノ新領土ヲ加ヘサセ給  
フニヨリ現在ハ世界屈指ノ大國ト稱セララル、ニ至  
ラセ給ヘリ然レバ國家トイフ意義ノ條件ニハ必ズシモ  
領土ノ廣狹ヲ要セズサレバ今假リニ我國土ノ内ヨリ  
北海道朝鮮及ビ其他ノ新領土ヲ除クモ日本帝國ハ  
日本帝國ナリ更ニ其殘リノ中ヨリ東國ハタ中州ヲ  
除クモ日本帝國ハ日本帝國ナリ  
又帝都ノ位置モ必ズシモ國ノ中央ニ限ラズ現ニ  
ソノ位置ノ東海道ニテモ可ナル以上ハ 人皇ノ祖以  
前ニソレガ西海道タリシトテ可ナルヘキハ勿論タトヒ  
天外異域ノ高天ヶ原タリモ可ナリサレバ 人皇ノ祖  
以後ニ於テ彼ノ豊臣氏ガ我帝都ヲ大陸ニ遷サント  
畫シタルガ如キ假リニ實現シタリシトスルモ我日  
本國ハ其場所ヲ中心ニ我日本國ナリ  
然リ帝都ノ位置ニシテ皇國土ノ範圍ニシテ國家ト



云フ意義ノ條件ニ何等關係ナキコト斯クノ如シ況  
ンヤ儀式ノ有無、制度ノ完、不完等ニ於テチャ要ハ唯  
苟モ我日本民族ガ

萬世一系ノ至尊ヲ中心ニ戴キ奉リテ住スル所住シ  
タル所<sup>住シ得ル所</sup>是レ我大日本帝國ナリコレヲダニ具  
備セバ遠キ神代ノ昔ト雖モ國家トシテノ資格ハ決  
シテ現在ニ劣ルコトナキヲ信ズルモノナリ就テハ  
單ニ史實上、理論上ノミナラズ對外上殊ニ惡化シツ  
、アル現代思想善導上

萬世一系ノ皇統御代數ハ 皇統ヲ萬世ニ垂レ且ツ  
「天壤無窮」ノ御神勅ヲ以テ 皇位ノ御璽タル三種  
ノ神器ヲ御代々ニ傳授シ給ヒタル 皇元祖

十一  
十二

天照皇大神ヨリ神代人皇ヲ通ジテ數ヘ奉ルコトニ  
ナサセラレ隨ツテ肇國ノ紀元モ 皇大神ノサシ出  
給ヒシ御時ト定メラレ度即チ紀元節日ヲ 伊勢大  
神宮ノ大祭日當日カ 皇祖皇大神ニ因アル日——ソ  
ノ日ニ於テ 皇祖皇大神ノ御神勅奉讀式ヲ行ハセ  
ラル、等上下舉テ 皇祖ニ大孝ヲ展ベ報本反始ノ  
誠ヲ致シマツルト同時ニ國民ガ  
皇室ニ對シテ寶祚ノ無窮ヲ祝シ奉ルニ極メテ意義  
アル日——ニ選バセラレ尙コノ意味ニ於テ曆及ビ  
學校教科書等ニモ改正ヲ施サレ  
以テ天壤無窮ノ皇運ハ天地開闢ノ初ヨリ保有シ給  
ヘル事實ト特ニ我 皇室ハ 大神ノ正裔ニマシマスニ



依リソノ尊嚴ノ絶對ニマシマス所以ヲ明示シ併テ  
萬世一系ノ御代數ヲ直接中心ニ仰ギ奉リ得ル關係ヲ  
皇別ノ民ノミナラズ神別、蕃別ノ民ノ思想ニモ及ボ  
サセラレ以テ我建國ノ始メハ世界ノアラユル古國  
ノソレヲ超越セル事實ヲ御表示アラセラレン事ヲ  
謹テ請願シ奉ル

猶ホ 天祖御即位ヨリ 人皇ノ祖御即位ニ至ラセ  
ラル、迄ノ年數ニ關シテハ別紙年數調査書記載ノ  
如ク調査致セリ本件ハ事

皇室ニ關シ且ツ國家肇國ニ關スル重大問題ナレバ  
是ガ御實行ニ當ラセラレテハ更ニ宜シクコレガ調  
査會ヲ御設置アラセラレン事ヲ別紙

十三  
十四

萬世一系ノ皇統御太元並ニ肇國ノ紀元ニ關スル説  
明圖及ビ 天祖御即位ヨリ 人皇ノ祖御即位ニ至  
ラセララル、迄ノ間ノ御代數並ニ年數調査書相添へ  
併テ請願シ奉ル

昭和六年十月十日

廣島縣安藝郡瀬野村大字上瀬野千六百三番地

平民 農 松 永 良 作



明治十七年八月二十五日生



241



萬世一系、皇統御太元並、肇國、紀元ニ関スル説明圖

天照大神皇大御出  
現ニヨリ  
君臣ノ分定マリ  
定マルト同時ニ  
也

肇國之紀元

祭政一致政治ノ行ハルタル時代。

溯スベキ紀元年間ノ圖

治者ト被治者ト、  
關係ヲ生ズ是レ

神代ノ時代

神勅ノ窮  
之ヲ

現ニヨリ

世萬

寶祚

(地神五代、御間)

皇天武神

位即御皇天武神

景行之御由征

人皇ヲ通ジテ數ヘ奉リタル御歷代之(御遷都)圖

人皇百二十四代、御間、圖

編者 松永良作

露光量違いにより重複撮影



萬世一系、自天統御太元並肇國、紀元ニ関スル説明圖

天照大皇帝御出天  
現ニヨリ  
君臣ノ分定リ  
定マルト同時ニ  
也筆織組ノ家國

(地神五代、御間)

寶祚

世萬

皇祖

無(皇孫、御遷都)

神代(神武、御遷都)

人皇ヲ通シテ數ハ奉リタル御歷代之(明治、御遷都)圖

之窮神勅

皇祖未開トセラレタル時代

治者ト被治者ト、  
關係ヲ生ズ是レ

元紀之國肇

圖、開古ノ時キハニ紀元二(崇峻)千五(天智)百九(武門)十一(應和)年間ノ圖

代報ハタテハ行ハレテ第一

編者 松永良作

之祖

人皇百二十四代、御間、圖

戸田篤子

位即御皇天武神

皇孫

御遷都

露光量違いにより重複撮影



天祖御即位ヨリ 人皇ノ祖御即位ニ至ラ  
セラル、迄ノ間ノ御代數並ニ年數調査書

243  
244



正 誤  
 六頁 十三行目 甲 寅 申 寅  
 八頁 末尾 昭和三年 大正三年

天祖御即位ヨリ人皇ノ祖御即位ニ至ラセラル、迄ノ  
 間ノ御代數並ニ年數調査書

天祖天照皇大神御出現ヨリ 人皇ノ祖神武天皇御即位ニ至ラセラル、迄ノ間ノ御代數並ニ年數ニ  
 關シテハ古來種々ノ説ハアレモソノ根據ノ稍々正確ニ似タルモノハ日本紀ノ「天祖降臨以來一  
 七十九万云々」トアルヲ 瓊々杵尊以來御三代ノ間ノ年數ト見テコレニ高天ケ原ニマシマシタル  
 天照皇大神ノ御治世三十二年或ハ廿五萬(天神祇)ト 天忍穗耳尊ノ御治世二十五萬或ハ三十萬(同)  
 トヲ通算シテ所謂地神ノ御間ヲ五代トシソノ年數ヲ二百三十四万二千四百六十七歳(拾芥妙)トス  
 ルガ如クソノ年數ハ御代數ノ少ナルニ比シテ極端ナル多大ノ年數ニアラザレバ 地神ノ總代數ヲ  
 五代、一代ヲ平均人世ノ三十年ツ、ニ見積リテ其間ノ年數ヲ僅ニ壹百五十年トセルガ如キ代數ニ  
 比シテ否前掲ノ年數ニ比シテ極端ナル少年數ナレバソノ何レニ據ルベキカヲ定ムルニ當リテ甚ダ  
 困難ナルノミナラズ其年數ニ於テモ共ニ首肯シ難キモノナリ  
 而シテソノ年數ノ稍々首肯シ得ルモノハ日本紀ニ「一百七十九万二千四百七十餘歳(或ハ一百七十九  
 七歳ト)トアルヲ其ノ歳ハ日ノ誤リナラントナシテ該歳數ヲ一百七十九万二千四百七十餘日ト見ル  
 ガ如キモノニテ即チ此筆法ニテ推算セバ前記高天ケ原時代ノ五十五万五千五百日トナル故ニ  
 地神五代ノ御間ノ總日數ハ通計二百三十四万二千四百七十餘日ト見ラレコレヲ年ニ換算シテ  
 天祖御即位ヨリ 人皇ノ祖御即位前ナル甲寅ノ年迄ヲ六千四百十八年計トスルガ如キモノナルカ  
 若クハ 地神五代ノ意義ヲ彼ノ世期ノ一世期ヲ百年トセルガ如クソノ五代ハ必ズシモ御代數ニア



ラズシテ全ク世期ノ如キ謂ナラントナシ而シテ其一代期ヲ一千年ト推定シテ 地神五代ノ御間ヲ五代期即チ五千年ト見ルガ如キモノニテソノ根據ニ於テハ何レモ臆ナル域ヲ脱スル能ハザルモノナリキ

然ルニ近時三輪義興氏ハ其根據ヲ富士古文書ニ置キ神皇紀ヲ著ハシテ神代ノ代數並ニ年日ヲ記載スル概略左ノ如シ

- 第一期 天之世 天之神七代 三十万日
- 第二期 天之御中世 日高見神十五代 六十七万五千日
- 第三期 高天ケ原世 天神七代 十八万五千日
- 第四期 豐阿始原世 地神五代 十七万八千日
- 第五期 宇家淵不二合須世、合須神五十一代ニテ二千七百四十一年(同紀卷末ニ附録セル神皇御歷代表ニ載セル所ノ各御代別年數ヲトナル何レカ誤リナルベシ)合計スレバ二千七百四十四年

右ノ内第一期ヨリ第四期迄ハ時代ノ長サヲ現ハスニ日數ヲ以テセルニヨリ其日數ヲ其當時ノ年ニ直シテ第五期ノ年數ニ合計スレバ神代ノ總年數ハ七千二百餘歳トナル(七、二〇一)斯クノ如ク神皇紀ハ開闢原始ノ第一期天ノ世ヨリ日數ヲ明記シ猶ホ同紀ハ第二期タル天ノ御中世ノ肇ニ於テ既ニ 天津日嗣ノ大御神ノ御紋章ヲ定メサセ給ヒ且ツ左守、右守ノ大神ヲモ置カセ給フ事ヲモ記載シ居レバ我肇國ノ紀元ハ同紀ニ依レバ天地開闢ト同時ニアルヲ勿論ナリサレド天ノ世ハ猶ホ屯蒙養正ノ時代ナレバ此時代ノ年數約壹千年(二十万日)ヲ該紀紀元年數ヨリ除キ第二期ノ第一代 天ノ御中主大御神ヨリ起算セバ六千二百餘歳ヲ得但シ同紀ニ據レバ此ノ年數ハ三百日

ヲ以テ一ケ年トナシタル年數ナレバコレヲ三百六十五日ヲ以テ一年トスル年數ニ換算スル片ハ我國ノ紀元年數ニ數フベキ神代ノ年數ハ實際ハ五百年計トナル(五、〇〇九九年(五、〇九六年七分強))コレヲ以テ神皇紀ヲ見レバソノ根據トセル富士古文書ノ價值及ビ信用ノ如何ハ別問題トシテ(別ノ研究ニ讓ルトシテ)同紀記載ノ年數辻書ハ吾人ノ略々首肯シ得ル所ナリ又故落合直澄氏ハ其著「太古史年歴考」ニ彼ノ日本紀所載ノ「天孫降臨以來一百七十九万云々」トアルヲ 瓊々杵尊以來御三代ノ間ノ年數ト見ズ 天神ノ大元祖ニテマシマス 國常立尊以來ナル神代ノ總年數ト見テ且ツ古事記以下諸書ヲ引用シテ是ヲ 天神七代並ニ 諸册二尊及ビ 地神五代ニ配分セルコト大略次ノ如シ

- 第一代 國常立尊 五万四千歳
  - 第二代 國狹土尊 三万三千六百歳
  - 第三代 豐斟淳尊 九十二万一千六百歳
  - 第四代 (泥士蒸尊) 二十万八千二百三十歳
  - 第五代 (沙士蒸尊) 二十万八千二百三十歳
  - 第六代 (角代尊) 二十万八千二百三十歳
  - 第七代 (活代尊) 二十万八千二百三十歳
  - 第七代 (大富邊尊) 二十万八千二百三十歳
  - 第七代 (大富邊尊) 二十万八千二百三十歳
  - 第七代 (吾屋根城根尊) 五万七千六百歳
- 以上神世七代合計一百七十七万三千六百六十歳

- 現世
- 太祖 伊弉諾尊 治世 一万三千四十歳



以下 地神ノ御代

- 皇 祖 天照大日靈尊 即位甲寅 歷年 四千歲
- 二世 忍穗耳尊 在位 三百歲
- 三世 瓊々杵尊 在位 五百三十三歲
- 四世 彥火々出見尊 山幸初丁亥 歷年三百二十二年元年ヨリ三百年計後尊行幸海宮居三年 還甲申彥波瀲尊降誕甲午彥火々出見尊元年 巳亥 在位 五百八十歲
- 五世 彥波瀲尊 在位 四十二年壽凡六百二十歲

地神ノ御代計五千七百六十七年

是ヲ以テ太古史年歴考ハ所謂地神ノ間ノ御代数ヲ五代トシソノ年數ヲ五千七百六十七年トナセルヲ知ル

而シテコノ太古史年歴考及同書ガ右年數ヲ割り出ス爲ニ引用シタル諸書ノ價值並ニ同書ニ置クベキ信用ノ程度ヲ知ラント欲セバ該書ノ序文ヲ見ルニ如カズ

太古史年歴考序

我が太古ノ年歴タル其傳記少カラズト雖記紀ノ普通本ニ於テハ記ノ彥火々出見尊ノ五百八十歲ト紀ノ一百七十九万云々ト唯此ノ二傳アルノミ此二傳ニ於テ之ヲ傷ケバ其標準トシテ見ルベキモノ一モ有ルヲナシ故ニ予ハ年歴講究ニ於テ此二傳ヲ以テ天賜ノ寶鏡トス此二傳一ハ百万位ノ

大數ヲ有シ一ハ唯百位ノ小數ヲ有ス此大差アル所以ノモノハ何ゾヤ一ハ天地開闢ヨリ算シタル大數ニシテ一ハ唯一世ノ小數ナレバ也是レ予ガ多年ノ辛苦ニ發明セル大体也此二傳ヲ標準トシ古代ニ於テ推歩セシ干支ニ就テ古書中ニ散逸セル傳記ヲ沙汰シ之ガ考證ニ備ヘ朝鮮史ヲ以テ之ガ註脚トシ略々我思考ヲ結了スルヲ得タリ之ヲ支那史、西史ニ比較スルモ敢テ突衝スル所ヲ見ズ殊ニ地質學ノ說ノ如キハ彌々其根基ヲ堅固ナラシムルモノ、如シ然シテ考證ノ足ラザル見解ノ誤レルガ如キハ予ガ淺學ノ固ヨリ免ル可ラザル所也ト雖此著ニ於テ予ガ腦力ヲ減殺セシト少々ナラズ若シ此著ニシテ大方考古ノ一助トモナラムニハ千歲ノ下遺憾ナカルベキモノ也

明治二十二年九月

落 合 直 澄

トアリ以テ該書ノ價值ヲ伺フベシ

以上調査列記シタル内先ヅソノ諸年數ノミニ付考フルニ最初ノ二百三十四万二千四百六十七歲ト其次ノ壹百五十年トハ共ニ極端數ナレバ我神代特ニ 地神ノ間ノ年數トシテハ首肯シ能ハザレドモ第三番目ノ年數即チ大年數ヲ日數ト見テ更ニコレヲ年數ニ換算シタル年數ノ六千四百十八年弱ト第四番目ノ 地神五代ノ間ノ代數ヲ代期數ト見テ一代期ヲ一千年ニ推定シテ五代期ニテ五千年トシタル年數トハタトヒソノ根據ハ臆ナルニモセヨ其數字ニ於テハ必ズシモ首肯シ能ハザルモノニアラズ又第五番目即チ神皇紀所載ノ年數五千百年計ト最後ナル太古史年歴考ニ 地神ノ間ノ年數トシテ所載ノ五千七百六十七年トハ頗ル吾人ノ首肯シ得ル年數ナリ殊ニ太古史年歴考ニ於テ然ルニアラズヤ。

予嘗テ我肇國紀元ノ年數ヲ調査スルニ當リ未ダ前記各年數アルヲ見聞セザル時ニ於テ唯古典ニ載



ス所ヲ直解シテ思フニ抑々 伊弉諾 伊弉册二尊ガ 皇祖天照皇大神ニ言依シ給ヒテ六合統治ノ大權ヲ授ケ給ヒシ時ハ神代開闢ノ當時ナレバ隨ツテ我肇國紀元ノ年數ハ彼ノ舊約全書所載ノ年數ヤ近時學者ガ埃及かるでヤナドニ想像スル年數ヲ凌駕スルハ勿論ナリト又思フニ我國ハ 君臣共ニ祖先崇拜ノ國ナリ是我國ガ世界萬國ノ祖國タル所以ナリト依ツテ竊ニ想像スラク我肇國ノ年數ハ少ク共凡ソ八千歳乃至壹萬歳ニモ及ビテ世界ノアラユル古國ノソレヲ超越スベシト而シテ後去ル大正十四年ノ末頃在京中知人大桐凡鳥氏ノ厚意ニ導カレテ前記太古史年歷考ヲ讀ミソレニ記載ノ地神ノ間ノ年數五千七百六十七年ヲ得ソレニ 神武天皇即位紀元ノ年數タル同年ノ二千五百八十五年ヲ加ヘシニ八千三百五十二年(當昭和六年ハ八千二百五十八年)トナリニキ

尤モ太古史年歷考ノ年表ハ 神武天皇即位紀元辛酉年ヲ以テ周幽王二年トシテ算出シ之ヲ假リニ古事記ノ歷年ト稱シ而シテ又 彥波瀲尊ノ御在位ヲ四十二年間トシ然モソノ御即位ノ年ヲ已卯トシアレバ 同尊ノ御在位ハ同書ニ依レバ 神武天皇御即位辛酉ノ前年タル庚申ノ年ニ迄及バセ給ヒタルコトニナルコノ點ニ於テ多少ノ疑ナキ能ハズ、即チ案ズルニ 彥波瀲尊ノ崩御ハ晚ク共ニ神武天皇ガ高千穗ノ宮ニ於テ 諸皇族ト東遷ノ御會議ヲ開キ給ヒタル申寅ノ年ヨリ後ニハアラセラレザルベシ今假リニ其ノ前年タル癸丑ノ年迄御在位マシタルモノト推定シ奉ラバ其御在位ノ年數ヲ三十五年間トシ奉ルカ其御即位ノ年ヲ已卯ヨリ七年間遡セテ壬申ノ年トシ奉リ隨ツテ彥波瀲尊以前御歷代ノ御即位ヲ順次七年ヅ、遡セテ 地神ノ總年數ヲソレダケ増シ改ムルカ二者ノ内何レカニ正サザレバ辻褄合ハザルコトニナレハ今之ヲ正サズ其故ハ是ヲ正シタリトテ古事紀ト日本紀ト紀元元年辛酉ノ條ニ於テ百二十年ノ差異アルノミナラズ日本紀年數ニモ誤差アルノ説

アリ又日本紀ト古事記ト何レガ正確ナリヤモ未ダ俄ニ定メガタク、而モ是等日本紀ノ誤差ヤ記紀ノ取捨決定セザル限リハ到底其ノ動遙ハ免レザルヲ以テ今暫ク太古史年歷考ニ所載ノ儘ヲ日本紀ノ紀年ニ加ヘ以テ國家設立ノ大調査會ノ調査ヲ俟ツコト、セリ大方ノ諸賢コレヲ諒セラレヨ

然ル所偶々其年十月一日現在ノ國勢調査ニ現ハレタル我帝國版圖内即チ内地、朝鮮、臺灣、樺太等ノ總計人口數ハ八千三百四十五万四千三百七十一人タレバコレニ同年末ノ調査ニ係ハル我委任統治下ニアル南洋群島ノ人口五万六千二百四十六人ヲ加フレバ略々時ヲ同ジクシテ八千三百五十二ノ年數ト略々コレニ類數ノ八千三百五十餘万ノ人口數ト見聞セリ右ハ位ノ上ニ於テハ一位ト万位トノ差コソアレ八千三百有餘ノ數字ニ於テ遇合シタリシハ如何ニモ不思議ナリシカバ余ハ是ヲ以テ自然ノ暗示ナランカト思ヒ隨ツテ其年數ハ正確ナルベク少クトモ正確數ニ近キモノナルベシト信ジタリキ

同時ニ又思フニ神代ノ年數ニ關シテハ上古ニ於テスラ調査ヲ試ミタル例アリ又近時ハ民間ノ一人ニテスラ前記ノ如キ年數ヲ調査シタリシ者アリ學術ノ進ミタル今日ニ於テハ國家ガ國家ノ力ヲ以テ神代年數ノ大調査會ヲ興スハ當然ノ國務トス而シテ其組織ニ於テハ單ニ官界ノ權威者ノミナラスタトヒ民間ノ學士號ナキモノト雖モ斯道ニ經驗アルモノハ之ニ參與セシメ當ニ歴史家ノミナラズ人類學者(人種學者、言語學者)考古學者等ハ勿論理學者、哲學者、地質學者、神道家モ宗教家モ國學者モ漢學者モ洋學者モ苟モ權威アル者ハ國ノ内外ヲ問ハズ之ニ列セシメアラユル世界ノ力ヲ集メテ徹底的ニ調査ヲナシタランニハタトヒ行詰ルトモ互ニ異ナリタル各方面ノ見地ヨリシテ集ル處必ズヤ、或ル一致點ヲ見出シ以テ世界ニ對ヒテ公表シ得ル又後世人ヲシテ容易ニ動カシ



得ザル年數ヲ求メ得ラルベシト  
 次ニ御代數ノ事ニ付一言致サンニ 地神五代ノ間ヲ五千年内外ニ見積リ奉ルハ一見 地神歷代ノ御在位年數餘リニモ長キニ驚クヤウナレトモコノ年數ニ對スル御代數ハ必シモ五代ニマシマサズシテ其實ハ彼ノ 素戔嗚尊六世ノ御子孫タル大國主命ノ御時 大統ハ尙ホ第二世 天忍穗耳尊ノ御時代ニテマシマシ又大國主命十一世ノ孫遠津山岬多良斯命ハ 地神第五世 彦波瀲尊ノ御宇ニ居給ヒシヨリ推シ計レバ彼ノ朝鮮ニ檀君ノ傳世通計一千五百歳トアルガ如ク又我神皇紀ニ字家澗不二合須世ニ同名異神ノ 合須神五十一代マシタルガ如クコノ五代モ或ハ著シキ神ノ御名ノミ傳ハラセ給ヒテ或ル御世代ハ脱洩セサセ給フ所モアラセラルベク又異神同名ニテ傳ハラセ給ヒシ御箇所モアラセラルベケレバコノ年數大調査會ニ於テハ又同時ニ御代數ヲモ出來得ル限リ調査シ奉ルベキモノナリ而シテ尙不明ナラセ給ハ、從例ニ依リ 地神ノ御間ヲ五代ニ數ヘマツルモ不可ナルベシ即チ同名異神ノ數代ヲ御一代ニ數ヘ奉ルモ不可ナルベシ其故ハ甚ダ畏レ多キナガラ 人皇ノ御時代ニ於テスラ現ニ 長慶天皇ノ如キ近頃迄御世代ヲ洩レサセ給ヒタル事アリシ御例アリ又 皇極、齊明兩朝ノ如キ 孝謙、稱徳兩朝ノ如キ御一帝ヲ二代ニ數ヘ奉リタル例アリサレバ逆ニ御二尊ヲ一代ニ數ヘ奉ルモ可ナルベク隨ツテ又同名異神ノ數代ヲ一代ニ數ヘ奉ルモ不可ナルベケレバナリ。

大正三年六月

著者 松 永 良 作

昭和六年十月一日印刷  
 昭和六年十月三日納本  
 昭和六年十月十日發行

(非賣品)

<b>不許複製</b>	
著者	廣島縣安藝郡瀨野村大字上瀨野千六百四十三番地 <b>松 永 良 作</b>
發行人	住所同上 <b>松 永 良 作</b>
印刷所	廣島市下柳町六十番地 開興堂印刷所印行 電話五七八四番



